大阪管区気象台140年の変遷

大阪管区気象台

1. 大阪管区気象台

「大阪管区気象台によると、近畿地方では・・・」。

テレビやラジオのニュースでよく耳にする言葉ですが、皆さんは大阪管区気象台がどこにあるかご存じでしょうか。

現在の気象台は、大阪市中央区の「谷町４丁目交差点」のすぐ近く、大阪合同庁舎第4号館の中にあり、ここから大阪府内のみならず、近畿地方に向けて防災気象情報を発表しています。その歴史は明治15年（1882年）、当時の大阪府が「大阪測候所」を設置したことから始まります。それから今年で140年、その変遷を紹介します。

大阪管区気象台（大阪市中央区大手前　大阪合同庁舎第4号館）

2. 大阪府立測候所

大阪府下で気象観測が始まったのは明治12年6月1日まで遡ります。当時はまだ設備も完全なものではなく、気象台に残る記録によれば、わずか1日3回、気温、風、天気を観測するだけのものでした。

測候所の組織が正式に発足するのは明治15年で、大阪府が当時の内務省に測候技術官の派遣を申請、大阪市北区堂島梅田橋南詰に建物を新築して「大阪測候所」の名称で発足、同年7月1日から観測を開始しました(図1)。

図 1. 大阪測候所(大阪市北区堂島梅田橋南詰)

翌年からは、観測結果を気象電報により中央気象台(気象庁の前身)に向けて発するとともに、中央気象台からは暴風警報を受けるようになりました。中央気象台から受けた暴風警報は、大阪測候所を通じて兵庫、岡山、徳島、愛媛の4県に通告するとともに、大阪の水上営業者にも知らされたそうです。明治17年8月1日には、西成郡天保町(現:天保山付近)の商船取締出張所に暴風警報信号標を設置、これが大阪における警報信号の始まりになりました。

明治17年8月31日、測候所は大阪市北区江ノ子島の警察本部内に移り、明治21年4月からは名称を「府立大阪一等測候所」に変更しました(図2)。明治23年10月1日、北区堂島浜通2丁目に庁舎を新築、移転しましたが、明治42年7月31日、大阪市北区の大半が焼ける大火災「北の大火」により、本館、地震計室を失いました。それでも観測露場と所長官舎は類焼を免れたことから、所長官舎を仮事務所として8月1日から観測を再開しました。焼けた庁舎は、大火から1年後の明治43年9月1日、大阪市西区一条通2丁目に移転して再建、ここで業務を開始しました。ちなみに、測候所発足当時は大阪府農商課長が所長を兼務していましたが、明治29年ころからは中央気象台から派遣された技手が所長に就いていたようです。

図 2. 府立大阪一等測候所(大阪市北区江ノ子島)

大正7年9月4日、「中央気象台臨時大阪出張所」が北区梅田町2787番地（日本通運会社の階上の一室）に設置されましたが、この臨時出張所は翌年の10月25日に神戸市中山手通の神戸測候所構内に移転して「中央気象台臨時神戸出張所」となり、のちの「海洋気象台」の基礎になりました。

図 3. 府立大阪測候所（大阪市西区一条通 2 丁目）

一方の府立大阪一等測候所は大正8年5月15日に「府立大阪測候所」と改称しました（図3）。

3. 府立大阪測候所と中央気象台支台の併設、そして室戸台風

大正7年9月、大阪市北区梅田に中央気象台臨時大阪出張所が設置されましたが、わずか1年で神戸に移転してしまい、次に中央気象台が大阪に事務所を置くのは、昭和時代に入ってからでした。

昭和5年8月25日、大阪市港区鶴浜通2丁目（現：大阪市大正区鶴町付近）に「中央気象台大阪支台」が設置され、業務が開始されました。支台には観測船「朝陽丸（7.35t）」が配備され、この頃は、大阪湾内の海洋観測も行っていました。 一方、府立大阪測候所も業務を続けており、昭和8年7月1日には、大阪市東成区（現：生野区）勝山通に移転しています（図4）。当時は中央気象台大阪支台と府立大阪測候所それぞれが予報を発表しており、その頃の新聞紙面には、「どちらがあたるか、明日のおたのしみ」といった文字が躍っていたそうです。

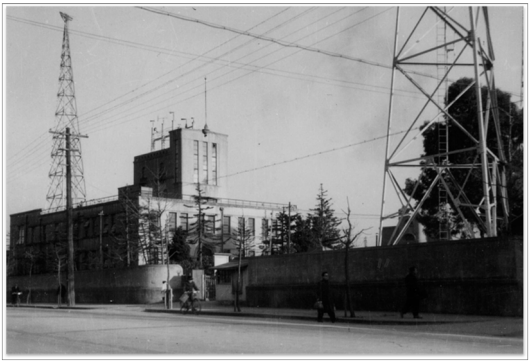
図 4. 府立大阪測候所（大阪市東成区勝山通）

そんな中央気象台大阪支台と府立大阪測候所を、歴史に残る台風が襲いました。昭和9年9月21日早朝、中央気象台室戸測候所（後の室戸岬測候所）では、日本の南海上を北上してきた台風により、911.6ヘクトパスカルの最低気圧を観測しました。台風は中心気圧を弱めながら、同日午前8時頃、阪神間を通過しました。この台風による猛烈な風により大阪

市内各地で小学校の校舎が倒壊、朝登校したばかりの児童や教職員などが多数犠牲になりました。また大阪湾岸では高潮により甚大な被害が発生しました。この台風は、のちに「室戸台風」と呼ばれるようになります。この台風により、中央気象台大阪支台は庁舎が流失、配備されたばかりの観測船も高潮により陸に押上げられました。また府立大阪測候所も無線鉄塔が倒壊するなどの被害を受けました（図5、図6）。

図 5. 府立大阪測候所鉄塔 3 基倒壊

図 6. 大阪支台観測船朝陽丸の被害

4. 府立大阪測候所の廃止、大阪管区気象台に

府立大阪測候所は室戸台風により鉄塔が倒壊したものの庁舎は残ったため、業務はそのまま継続、倒壊した無線鉄塔は、昭和10年4月6日に竣工、更新されました。一方の中央気象台大阪支台は庁舎が流失してしまったため、敷地内に木造2階建ての庁舎を再建、昭和9年11月26日より、新しい庁舎で業務を開始しました。

これまでの中央気象台大阪支台と府立大阪測候所の関係が変わり始めたのはそれから1年ほど経った頃で、中央気象台大阪支台が府立大阪測候所敷地内に移転することになりました。昭和11年2月4日、大阪市東成区勝山通り9丁目の府立大阪測候所敷地内に中央気象台大阪支台の庁舎（鉄筋コンクリート造平屋建）が完成、同年6月1日から、府立大阪測候所と同じ場所で業務を開始しました。そして2年後の昭和13年7月14日、府立大阪測候所が行ってきた業務を中央気象台大阪支台に引き継いで府立大阪測候所は廃止、明治15年から大阪府が行ってきた測候所の時代が終わりました。

昭和14年11月1日、中央気象台大阪支台は、「大阪管区気象台」と名称変更、ここから現在に続く大阪管区気象台の時代となりました。現在の大阪管区気象台の管轄は近畿2府4県、山口県を除く中国4県、四国4県の2府12県ですが、当時はこれに三重県と山口県を加えた2府14県を管轄していました。

5. 大阪大空襲から戦後、そして第二室戸台風

昭和16年12月太平洋戦争勃発、日本は戦時下に入っていきます。全国の気象官署は戦時態勢となりました。衛星やレーダーの無いこの時代、当時の軍にとって気象観測データや予測は作戦を立てる上で非常に重要であり、気象報道は軍により厳しく管制されました。

しかし戦争も中盤を過ぎると戦況は悪化、大阪府内も昭和19年12月9日の空襲以降、幾度となく空襲を受けるようになりました。

昭和20年6月15日、朝から小雨が降る中、大阪市内では8時40分頃から空襲が始まり、気象台北方3kmほどで火災が発生、周囲はみるみる炎と煙に覆われました。上空にはB29が飛ぶ音が聞こえているものの、雲が低く、機影はほとんど見えません。そのうち、焼夷弾が落ちる「サー」という音が頭上をかすめ、気付くと観測露場の百葉箱の前で小型の焼夷弾が燃えていました。周囲はものすごい煙と炎で、当時の職員は消火しながら、「もう終わりかなぁ」などと話していたそうです。幸い、気象台には不発弾交じりの数発の焼夷弾が落ちただけで、類焼は免れました。ただ、こんな中でも、観測当番者は観測野帳（気象観測用のメモ帳）を手に、観測を続けたということです。そして昭和20年8月15日、終戦を迎えました。

戦後、気象報道管制も解除され、ふたたび気象情報が一般にも知らされるようになりました。昭和29年9月15日には、大阪管区気象台に日本初の現業用気象レーダーが設置され、不定期ながら観測が開始されました。

そんな折、過去の悪夢を彷彿させる台風が来襲します。昭和36年9月の第二室戸台風です。

この台風は昭和9年に大阪府内に甚大な被害をもたらせた室戸台風に酷似した経路で進んでおり、台風の規模、強さもそれに匹敵するものでした。

強い危機感を持った大阪管区気象台長の大谷東平は、昭和36年9月16日、大阪府知事、大阪市長、大阪府警察本部長、NHK大阪放送局長に向け、警告を発しました。

「大阪管区気象台長、大谷東平が申し上げます。大阪は最悪の事態になります。」

室戸台風に匹敵する台風でしたが、住民の避難、事前の対応が功を奏し、台風の勢力のわりに被害は少なく抑えることができた成功例とも言われています。

6. 大阪管区気象台、合同庁舎に移転

昭和43年3月31日、八尾市の高安山に大阪レーダーが完成、これに伴って大阪管区気象台敷地内の気象レーダーは廃止となりました。さらにその年の8月1日、大阪管区気象台は、「大阪市東区法円坂町6番地25」に建設された大阪合同庁舎2号館に移転しました（図7）。跡地となった御勝山南公園には現在、大阪管区気象台

跡の石碑が立っています。

平成5年2月1日には、隣接する大阪市中央区大手前4-1-76に大阪合同庁舎4号館が建設され、移転しました(図8)。

現在の大阪管区気象台は、東京の気象庁が首都直下地震などで機能が失われた場合に業務代行するなど、明治15年に大阪測候所として設立した時代とは比べものにならないほど大きな役割を持っています。それでも、大阪府内にお住いの皆さんに向けて防災情報を発信するという使命は当時と全く変わっていません。大阪管区気象台はこれからも大阪の空を見つめ、その下で暮らす皆さまに防災気象情報を届け続けます。

なお、大阪管区気象台では、気象庁ホームページに「気象台140周年記念特集」を掲載しています。ぜひこちらもご覧ください。

https://www.data.jma.go.jp/osaka/140th/index.html

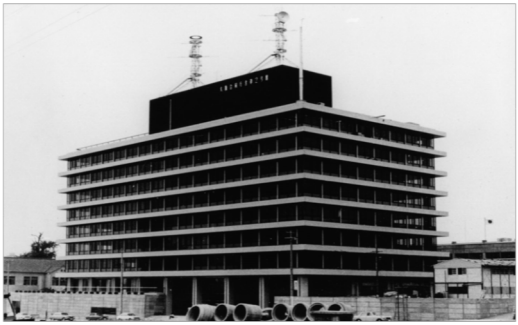

図 7. 大阪管区気象台(大阪合同庁舎 2 号館)

図 8. 現在の大阪管区気象台
(奥の建物。手前は大阪合同庁舎 2 号館)

※参考文献:大阪府の気象百年、大阪管区気象台官署履歴。

※初出:大阪市立科学館　月刊うちゅう2022年9月号(2022年9月10日発行)
本書に転載するにあたって、体裁の一部を改変しています。